アートミーツケア学会 News+Letter

Vol.14 2016 Spring

CONTENTS

2015年度大分大会報告「醸す力、編む技―コミュニティを変えるアート」
椋野美智子

レポート：青空委員会（大阪／東京）開催
レポート：シンポジウム　「療養環境とアート　日英の現場から」　滝沢洋子
アートミーツケア数珠つなぎ　古原彩乃

Photo：音楽家・片岡祐介さんが高齢者施設で行ったワークショップ（大分県・みんなの芸術文化体験事業にて）

醸す力、編む技―コミュニティを変えるアート 2015年度大分大会報告

多様性を編みこみ、寛容を醸し出し、新たな社会への展望を拓く、コミュニティの創造に向けたアートの可能性を探ることをテーマに開催した2015年度大会。スタディツアーで訪れた国東半島では、その地固有の空気感、時間の流れ方を体感しました。大会では、実行委員企画プログラムのほか、公募プログラムとしてポスターセッション8本、プレゼンテーション14本、トークセッション6本を実施。その多彩な内容にさらなるネットワークのひろがりを感じました。今号では、大会実行委員のレポートにより、大会を振り返ります。

レポート

「地域を変えるアートの可能性を探って」

椋野 美智子 元大分大学福祉科学研究センター教授

大分でアートミーツケア学会を開きたいと思ったのは3年前、愛媛大会に参加したときである。当時私は所属する大分大学福祉科学研究センターのプロジェクトの一つとしてアートによるまちづくりを研究しており、その過程で学会の存在を知り、大分での大会開催を希望したのだ。しかし、実のところ、当時大分県内の会員は2～3名で、大分でのアートミーツケアの活動は、障がい者アートの作品展しか思いつかない状況だった。

そんななか、大分大会を成功させるために3つの方針を立てた。まずは所属する大分大学福祉科学研究センターと緊密に連携すること、第2に幅広く地域の協力を得ること、第3に大分のアートミーツケアの活動を掘り起して発表してもらうことである。

ポスターセッションの様子（写真上2点とも）

センターの行事と学会の大会を一体化

第1の方針については、センター主催のフォーラムやロビー展示と、学会主催のトークセッションや大会を、同じ場所、同じ日に事実上一体として行うこととした。フォーラムでは学会の紹介で平田オリザさんに基調講演をいただき、学会副会長の中川眞さんと地元のパネリストが加わってディスカッションを行った。学会報告の広報も兼ねて一般の方が通行するロビーで大分の取り組みの展示を行い、センター主催のユニバーサルデザインな鑑賞会を学会のスタディツアーに組み込んだ。

トークセッション2：D「ケアにおける食のアート」より（写真上2点とも）

障がい者のための注文服のプレゼンテーションより

幅広い地域の方々の参加協力

第2の方針については、学会員や大分大学はもとより、地元の行政、美術関係者、福祉関係者、企業などが参加する実行委員会を組織した。実行委員以外にも地域の多くの方々に大会参加を呼びかけ、交流会は会員のほか地域から多くの方が参加してにぎわった。

大分発のさまざまな取り組み

第3の方針は当初一番難航した。ところが不思議なことに、大会まで3か月を切ったころから様々なアートミーツケアの取り組みが立ち現われてきた。それは、それまでアートとも場合によっては福祉ともとらえていなかった活動である。たとえば障がい者を美しく見せる機能的でおしゃれな注文服づくり、83歳からの水彩画展、地域のこどもたちと大人たちが協力して制作する壁画プロジェクト、過疎の地の廃校で段ボールアートによって世界を相手にビジネスを展開し地域と関わる企業。嚥下困難な高齢者のための見た目も美しい食事づくりの報告は、長く学会に参加してきた会員から「今までの中で一番感動した。パティシエより何よりこれこそが食のアートだ」と絶賛された。どの報告者も、全国から参加した学会の会員の前で発表して議論を交わしたことは、これからの活動の大きな推進力となったように思う。

大会に半年先だって、大分では新しい県立美術館がオープンし、アートによる地域づくりが県内各地で盛んになっている。それを単なる賑わいづくりや観光客の誘致だけにとどめてはならないと思う。アートがケアに出会うことにより、アートもケアも変わり、地域も変わる。この大会をきっかけに、大分でその動きが拡がってくれたらと願っている。そして全国から参加してくれた会員にとっても何らかの示唆となっていたら幸いである。

なお、字数の関係と筆者自身があまり参加できなかったため、大分以外の企画に触れられなかったが、スペシャルセッションを始めとした充実した発表が活発に行われた。

最期に、大会の開催にご協力いただいたすべての方に感謝をして報告を終えたい。

椋野 美智子（むくの・みちこ）
／元大分大学福祉科学研究センター教授
大分県生まれ。1978年東京大学卒業、厚生省（現厚生労働省）入省。2006年から2015年2月まで大分大学福祉科学研究センター教授。専門は社会保障と福祉。アートと福祉によるまちづくりを研究。コミュニティカフェの運営、英国のアートによる地域再生の調査なども実施。2012年には個人としてもアート施設「浜脇の長屋」を開設。

株式会社アキ工作社を見学（国東半島スタディツアーより）

七島イ振興会にて工芸品の制作工程を体験（国東半島スタディツアーより）

レポート
スタディツアー

ここから始まる ユニバーサルデザインな鑑賞

大分市美術館で展覧会とコンサートを障害のある人とない人が共に鑑賞する試みを行った。参加者は視覚障害の方3名、聴覚障害の方1名を含む約70名。展覧会は、視覚障害の方を含む2つの少人数グループで案内人とともに鑑賞した。コンサートは、音楽に合わせてダンスをし、また聴覚障害の方に演奏中のピアノに触れてもらった。終了後、ディスカッションを行った。

「描かれている人物について感じたことを言い合うのが面白い」「学生が視覚、聴覚の障害がある人にもわかってもらおうとダンスを創作したことがよかった」「障害の種別や程度によって必要な配慮は異なるのでターゲットを絞った方がいい」「障害の有無にかかわらずアートの楽しみ方は人それぞれ違う」など活発な意見交換がなされた。障害のある人とない人が共にアートを楽しむためのスタートラインとなった。

協力：大分大学福祉科学研究センター

アートミーツケア学会 2015年度総会・大会「醸す力、編む技―コミュニティを変えるアート」

■日程　2015年11月6日（金）、7日（土）、8日（日）
■会場　大分県立総合文化センター／iichiko総合文化センター、大分県立美術館
■主催　アートミーツケア学会
■共催　大分大学福祉科学研究センター

■プログラム

［11月6日（金）］
□国東半島スタディツアー
□絵画と音楽のユニバーサルデザインな鑑賞

［11月7日（土）］
□大分県立美術館ツアー
□関連企画 大分大学福祉フォーラム
・基調講演「新しい広場をつくる」
平田オリザ（劇作家、演出家。劇団青年団主宰、こまばアゴラ劇場芸術総監督）
・パネルディスカッション「コミュニティを編み直す―つなげる力とアート―」
中川　眞（大阪市立大学文学研究科教授、アートミーツケア学会副会長）
三浦宏樹（大分県芸術文化スポーツ振興財団 経営企画本部 参与）
コーディネーター：椋野美智子（元大分大学福祉科学研究センター教授）
松岡勇樹（株式会社アキ工作社 代表取締役社長）
平田オリザ
□ポスターセッション

［11月8日（日）］
□プレゼンテーション
□スペシャルセッション「異界・妖怪・異人～妖怪の棲むまちづくり～」
□分科会 トークセッション1
A　障がい者アートマネジメント―原石を見つける眼、磨く技
B　身体での共創表現は、臨床の場の何を変えるのか～「てあわせ」表現の実践から、その可能性を探る～
C　イギリス視察旅行報告会 ～病院・ホスピス・コミュニティー～

分科会 トークセッション2
D　ケアにおける食のアート
E　地域と子どもとホスピタルアート
F　東京迂回路研究フォーラム報告＋哲学カフェ：「対話は可能か？」を対話する

速報！　アートミーツケア学会 2016年総会・大会のご案内

2016年度大会は下記のとおり開催する予定です。
■日程：2016年11月5日（土）、6日（日）（予定）
■会場：札幌市立大学（予定）

詳細は決まり次第、学会ウェブサイト、facebookページなどでご案内させていただきます。

レポート

青空委員会（大阪／東京）開催

2006年に設立したアートミーツケア学会は2016年に10周年を迎えます。アートとケアの現場での出会い、研究者と実践家の出会いという「二重の出会い創出」をミッションとして掲げてスタートした本会の活動について、10年を機に振り返り、より開かれた学会のあり方、役割を会員の皆さんとともに考えていきたいと思います。アートとケアが幸福に出会い、未来を担う実践家や研究者、アーティストを育て、風通しのよい社会をつくりだすことを目標に、自由な議論をしていきます。ここでは、その第1弾として開催された青空委員会の様子を、事務局より報告いたします。

2015年12月8日　青空委員会@大阪

昨年12月に大阪市立大学梅田サテライトにて、「青空委員会@大阪」を開催いたしました。アーティスト、研究者それぞれにアートミーツケア学会に所属するメリットは何なのか、など多くの問題提起がありました。会員の人と出会う場をたくさんつくってほしい、研究者とアーティストが一緒に作品をつくってみては、という意見もあり、今後の具体的な展開が期待されるような内容となりました。ぜひ多くの方にご参加いただき、一緒に、新しく面白いことをこの委員会から発信していきたいと思います！

2016年1月6日、2月12日　青空委員会@東京

今年1月に「芝の家」にて、2月に「芝3丁目場づくり研究所」にて、「青空委員会@東京」を開催しました。参加者は10名ほど。初めて顔をあわせる方も多く、第1回は自己紹介からはじめ、AMC学会に期待することについて、それぞれの立場から思うことを出し合い、話し合いました。続く第2回では、前回の流れをうけ、さらに検討したいトピックについて協議。トピックごとにワーキンググループをつくり、実際に動いていくこととなりました。2回の委員会をうけ、立ち上がったワーキンググループは次の4つ。(1) 関東の小さい集まりを考える、(2) 論文（言語化）、(3) おもろいことを考える、(4) 研究者、実践者の関係をどうつくるのか。それぞれのグループの成果は、今後何らかのかたちで発表できればと考えています。ご期待ください。

■青空委員会とは・・・会員参加による研究や協働のプロジェクトが推進されることをめざし、プロジェクトの企画・運営を行うための委員会です。副会長を中心とし、理事、会員により構成されます。委員会は固定的なものではなく、会員からの発起により随時立ち上げることが可能です。今回は副会長からの発起によります。

オンラインジャーナル第7号を発行しました

合計6本の論稿を収録しました。投稿いただいた方、査読やコメントでご協力いただいた方、編集委員のみなさま、ありがとうございました。また、今号より編集委員長からのメッセージを掲載しております。いずれも学会ウェブサイトよりご覧いただけますので、ご意見やご感想など、ぜひ事務局までお知らせください。オンラインジャーナルは普段の活動をことばで表現することのできるツールです。次号もたくさんの方からのご投稿をお待ちしております。
（ウェブサイトをご覧になれない方は、送付いたしますので事務局までお知らせください。）

CONTENTS

論文
●被災地での共創表現と共振の深化
―このフィールドは、何を問いかけているのか―　西洋子、三輪敬之
●障害のある人と地域社会のつながりの構築をめざしたデジタルメディア実践とソーシャルワーク　舟木紳介、藤田正一
●アートとケアにおける研究とその視座
―対話型実践研究を事例に　三宅博子、長津結一郎、井尻貴子
●ある自閉症の子どもと音楽療法士の<出会い>の考察
音楽の中で自己が析出するとき　山本知香

実践報告
●大道芸と笑いの体操を組み合わせた「笑い」のレクリエーションの老人介護施設における実践報告　田久朋寛

研究ノート
●アートとケアの接点を支えるのは誰か
～高齢者施設における芸術体験活動に関する環境整備・考　古賀弥生

レポート
シンポジウム

「療養環境とアート　日英の現場から」この地に蒔かれた種は―

滝沢 洋子　耳原総合病院品質管理部 教学・広報課課長／院内アート委員会事務局

2015年秋、NPO法人アーツプロジェクトが実施した、療養環境におけるアートの研究者・実践者・医師らのメンバー12名での、イギリスへの視察旅行。その報告とともに、日英を比較しての現状や課題等を考えるセミナーが開催されました。アートミーツケア学会員である滝沢さんにレポートしていただきました。

Art & Healthを国家戦略と位置づけ、先陣をきる英国の医療機関他の視察報告を森口副理事長から。文字通り「美術館」とみまがう色彩鮮やかな報告画像から、参加者のため息が聞こえてきそうだ。あらゆる宗派を受け入れる聖なる場所、毎日のように行われる生演奏会、視覚障がい者に配慮した立体造形、医学・看護またまちの歴史をリスペクトした展示物、映画館まである―「(病院で) ここまでやるか」。それもimpact outcome(究極の最大成果)を「すべてのひとのWell Being向上」と位置づけ、10余年で医療費予算を倍加させた国家政策と戦略的裏付けがあったればこそと知る。

国内事例報告者のふたりは、病院専属のアートディレクター。耳原総合病院(大阪府堺市)では、2015年4月全面新築を機に全館ホスピタルアートを導入。室野ディレクターは、まずコンセプトストーリーを組み立てた。病院スタッフ、地域住民の声に耳をすまし、60余年の歴史を「アート」という衣にまとわせる。「決して目立ちたいわけではない、立派な美術品を展示したいわけではない、訪れるすべてのひとが『大事にされている』と感じられるアートに」(室野ディレクター)。四国こどもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)は、ふたつの旧国立病院が統合し移転新築。3年経過した現在も、院内スタッフは「問題解決の相談に」森ディレクターのもとを頻繁に訪れる。館内サイン、企画の案内、近隣養護学校とのコラボレーション―「伝える」ことにこだわり、ことばだけではない「アート」やデザインの力をいかんなく発揮、活躍されている。

かくいう当方も英国視察に同行させていただいた。あらゆる場面で「(アートがつけいる)すきま」を感知せずにはおれない街だった。20年ほど前EBM(evidence baced medicine)を提唱した国が、数年後なぜにNBM(narative baced medicine)と唱えるのか、疑問が少々氷解した。求められる機能強化、合理性、明確な根拠と同時に、歴史や哲学をアートに包んで文脈丸ごとを受け入れる土壌までは、直輸入しがたかろう。

こうしているいまも生命が産声をあげ、間断なく救急患者が搬入、スタッフはひとや病に寄り添い、たたかい、患者や家族は人生のひとときを過ごし、そして訪れる死を迎える場所でもある「病院」。毎朝出勤時、建物そのものが鼓動を打つ「生き物」ように見えてならない。種は蒔かれた―物語を共有し、育み、次の頁に何をどう描き、次世代へ「この地で」どう引き継ぐか―みなさんといっしょに大きな野望に挑みたい。

北海道・関東からの参加者も一満員御礼のセミナー会場風景

国立公園内に病院が立地(王立リバプールこども病院全景)

王立リバプールこども病院のフロント。右手奥の"ツリーハウス"は宗派・国籍を問わず、あらゆる訪問者のための「聖なる場所」。

チェルシー・ウェストミンスター病院にある「medi cinema」。映画上映時以外は、手術ライブやカンファレンス会場などに使用。

■日時　2016年2月28日(日) 13:30～15:30　■会場　ブリーゼタワーホール(大阪市内)
■主催　NPO法人アーツプロジェクト
■プログラム
□報告1「療養環境にアートが及ぼす力―イギリス視察報告」
　森口ゆたか(NPOアーツプロジェクト副理事長)
□報告2「海を越えて共鳴するこころ　耳原総合病院の芸術と文化の現場から」
　室野愛子(NPOアーツプロジェクト理事・耳原総合病院アートディレクター)
□報告3「アートディレクターの役割とその可能性―四国こどもとおとなの医療センターでのとりくみから」
　森　合音(NPOアーツプロジェクト代表・四国こどもとおとなの医療センターアートディレクター)
□進行　山口(中上)悦子(大阪市立大学大学院医学研究科医療安全管理学准教授)

滝沢 洋子(たきざわ・ようこ)
1967年長野県生まれ。1991年社会医療法人同仁会就職。現在、耳原総合病院品質管理部 教学・広報課課長／院内アート委員会事務局。

アートミーツケア 数珠つなぎ

古原彩乃さんに聞きました

全国各地で活動されている会員のみなさまをご紹介する「アートミーツケア数珠つなぎ」。今回は、アートコーディネーターとして活躍する古原彩乃さんに、2015年度大会でもご発表くださった大分県『みんなの芸術文化体験事業』について伺いました。

Q1 『みんなの芸術文化体験事業』とは。

大分県内の高齢者施設、障害者施設、児童養護施設などの福祉の現場に、アーティストを派遣し、体験型のアートワークショップ(WS)を行う活動です。大分県の文化芸術セクションとNPO法人BEPPU PROJECTが協働して実施しています。初年度2014年は片岡祐介さん(音楽)、佐久間新さん(舞踊)、新井英夫さん(舞踊)、2015年は鈴木潤さん(音楽)、水内貴英さん(美術)、山猫団さん(パフォーマンス)にも来ていただいています。

Q2 その活動をするきっかけは。

2013年にBEPPU PROJECTが大分県内40校の小中学校でアートWSをする機会があり、コーディネートを担当しました。進めるにあたり、関係者を増やしたいと考え、トークイベントを開催しました。そのときに県庁の職員さんがいらして、教育だけでなく福祉の現場にアートを！と思ってくださって、事業につながりました。よく現場に来て飲み会にも参加する、すてきな県庁職員さんです。

Q3 活動のなかで大切にされていることは、どんなことでしょうか。

関わる人みんなの「まいにち」にどんなスパイスを加えられるかを考えながらコーディネートしています。様々な立場の人が関わるのがWSのおもしろさ。利用者さんはもちろん、施設の日常を作る施設職員さんとの時間も大切にしています。今年は職員さん向けのワークショップも開催しました。また、アーティストにとっても挑戦の場をつくりたいと常々思って活動しています。

Q4 これまでの活動のなかで、印象に残っているエピソード／できごとはありますか。

障害者福祉施設での片岡祐介さん、佐久間新さんとの連続WSの最終回。いつもは車椅子の上で激しく揺れていたKさんが車椅子から降りて床の上を自由に動き回っていました。知的障害のある人の声や動きを真似ることでコミュニケートする佐久間さんを、それまでは「見守って」いたのですが、思いっきり迫ってくるKさんに私もどうしても答えたくなり試みてみました。そのとき、言葉以外のコミュニケーションがあるということの本質にはっきりと触れたような気がしました。

Q5 大分県という場所で活動を行うことについて、考えるところがあれば教えてください。

大分県は「豊の国」という名の通り本当に豊かな地だと感じます。海もあり山もあり、県内でまったく違う風景、味、文化、知恵に出会える。そんな大分に東京からやって来て、ものごとに関する考えの枠組みがぐんと広がった気がします。あれいいな！これもすてきだな！とよいものを発見する触角が増えたというか。豊かさゆえなのか外とのつながりが薄いなぁと感じるところもありますが、この土地からのびのびとした新しい価値観を中央に発信することができるんじゃないかと思います。

Q6 今後やりたいことや展望について教えてください。

いま挑戦したいのはWSの場を開くことと、定点観測することです。WSの場で生まれる豊かなものを外へおすそわけすることで、閉じられたそれぞれの現場が心地よく開いていくのではないかと思っています。WSから生まれる企画やWS以外の企画のあり方もさぐっていきたいです。また、福祉や教育の現場にどっぷり浸かって定点観測したいという思いが強くなり、今年は静岡の障害児の福祉施設でも芸術分野の専門職として働くことになりました。これからもさまざまな場で、アートに限らず「驚き」に出会える場作りをしていきたいです。

Q7 アートミーツケア学会に対して一言！

創立時から参加させていただいているアートミーツケア学会。当時大学生だった私もいつの間にか自分の現場をもつようになっていました。学会の一番の魅力は毎年の大会での出会い。宝物のようなすてきなご縁をたくさんいただきました。これからもさまざまな人、もの、場所との出会いのある学会であってほしいなと思います。

話を聞いた人

古原 彩乃(ふるはら・あやの)
1987年東京生まれ。教育系出版社にて学校教材の編集を担当後、NPO法人BEPPU PROJECTにてワークショップの企画を担当。その後フリーランスとして、学校、児童館、福祉施設、フリーマーケット等さまざまな場で 芸術、学び、遊びをテーマにしたワークショップやイベントを企画する。熱海&別府在住。

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1. 大会の開催
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年１回大会を開催します。

2. 調査研究の推進
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3. 学会誌の発行
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

4. ニュースレターの発行
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

5. フォーラム、シンポジウムの開催
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7. 国際交流の推進
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先　アートミーツケア学会
口座番号　00920-4-252135

2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。

3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

□個人会員　一般 10,000 円　学生 5,000 円
□賛助会員　30,000 円

役　員（敬称略）

□会長　鷲田清一（京都市立芸術大学理事長・学長、せんだいメディアテーク館長）
□副会長　中川　真（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
副会長　森口ゆたか（美術家、NPO 法人アーツプロジェクト副理事長）
□常務理事　播磨靖夫（一般財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事　秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
理事　坂倉杏介（東京都市大学都市生活学部准教授、三田の家 LLP 代表）
理事　杉林英彦（愛知教育大学准教授）
理事　鈴木理恵子（女子美術大学准教授）
理事　関口怜子（ハート＆アート空間ビーアイ代表）
理事　ダーリング・ブルース（美術史家）
理事　高橋伸行（アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター）
理事　銅金裕司（メディアアーティスト、京都造形芸術大学教授）
理事　並河恵美子（認定 NPO 法人芸術資源開発機構代表理事）
理事　野津　亮（大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科准教授）
理事　日野陽子（京都教育大学准教授）
理事　本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／文学研究科准教授）
理事　水野哲雄（京都造形芸術大学名誉教授）
理事　見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
理事　三輪敬之（早稲田大学創造理工学部教授）
理事　山口悦子（大阪市立大学大学院医学研究科医療安全管理学准教授）
理事　横川善正（金沢美術工芸大学名誉教授）
□監事　柊　伸江（株式会社ダブディビ・デザイン代表取締役）
監事　田中みわ子（東日本国際大学准教授）

アートミーツケア学会 オンラインジャーナル　第8号　投稿案内

会員のみなさまから、論文、実践報告、研究ノートの投稿を募集いたします。

■締切：2016 年 9 月 15 日（木）必着

詳しくはアートミーツケア学会ウェブサイトをご参照ください。

■2017 年 3 月発行予定

編集後記

●2006 年の学会設立から今年で早10 年。まだまだ課題はありますが、そこにはより良くなるためのヒントが隠れているはずです。東京と大阪で開催している青空委員会では、学会に期待することやこれからの学会のあり方を、膝をつき合わせて話し合っています。ご参加が難しい方も、学会活動について、忌憚のないご意見をお寄せください。
（中島香織）

●2015 年度大会は、大分にて開催。共催の大分大学福祉科学研究センターの尽力あり、実り多き会となりました。今年度大会は、北海道にて開催する予定です。先進的な発表や活発な議論、そして秋の味覚を楽しみに、まだ参加されたことのない方も、ぜひお気軽にご参加ください。
（井尻貴子）

●3月に発行したオンラインジャーナルでは、論文、実践報告、研究ノートあわせて 6 本が収録されています。実践を文章にするのは難しいことだと思います。しかもアートとケアの分野をこえて。でもだからこそ、できたものはきっと次につづく人にとっても意味があるはずです。ぜひ、読んでみてくださいね。
（森下静香）

アートミーツケア学会
ニュースレター
Vol.14　2016 年 5 月 1 日発行
発行　アートミーツケア学会
http://popo.or.jp/artmeetscare/
〒 630-8044 奈良市六条西 3-25-4
一般財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501
E-mail.art-care@popo.or.jp